

生～中学3年生)と就学前版(2～6歳)を翻訳し、原著者と共同でバックトランスレーションをおこなった。本尺度は成人版と同様に、4つの気質特性(新奇追求性・損害回避性・報酬依存性・持続性)と3つの性格特性(自己志向性・協調性・自己超越性)の7つの下位尺度から構成されている。ジュニア版は108項目、就学前版は82項目で、“はい・少しはい・少しいいえ・いいえ”の4段階評定で回答を求めた。0歳版と1歳版については、気質部分のみを実施した。

②問題行動傾向(Child Behavior Checklist CBCL, Achenbach et al., 1983) 2～3歳および4～16歳版の親記入版(詳細は第2章参照)を実施した。回答結果を因

子分析して得られた2因子: Externalizing 尺度(注意欠陥、攻撃的、反社会的、反抗的、衝動的行動傾向)と Internalizing 尺度(抑うつ、不安・恐怖、心身症的傾向)の得点を用いて分析をおこなった。

③環境要因に関わる変数 人口統計学的変数(出生順位、性別、家庭の社会経済的要因)、きょうだい役割、双生児意識、親の養育態度・愛着感、ライフイベント、メディア接触、住居(2人が個室を有しているか、など)や学校(違う学校か、同じクラスか、あるいは2人の学校適応の様子など)に関する変数についても測定をおこなった。

表2 Temperament & Character Inventory: TCI (Cloninger, 1994) の特性次元

① 気質→神経伝達物質の代謝や分泌の特徴を想定

- ドーパミン=行動の“発進”(新奇探求性: Novelty Seeking)
- セロトニン=行動の“抑制”(損害回避性: Harm Avoidance)
- ノルエピネフリン=“行動の持続”
- (報酬依存性: Reward Dependence; 持続性: Persistence)

② 性格→ 気質的特徴の上に後天的に構成されるもの。自己概念と深く関わる3特性。

- ・ 自己志向性(Self Directedness)
- ・ 協調性(Cooperativeness)
- ・ 自己超越性(Self Transcendence)

(3) 結果の概要

ジュニア版および就学前版 TCI の4つの気質特性と、問題行動チェックリスト CBCL の2つの下位尺度に関する単変量遺伝解析をおこなった。表3の通り、4つの気質特性に関しては遺伝要因(A)と非共有環境要因(2人に個別に影響を与えるもので、2人を違わせていく要因、E)のみのAEモデル

の適合度が最も高い値を示し、共有環境要因(2人に共通の効果を与える環境要因で、ふたりを類似させる効果をもつ)の影響はほとんどないことが示された。この結果は、成人のパーソナリティについて検討されてきた先行研究と同様のものであり、発達初期よりパーソナリティの形成には遺伝的要因と個別の体験要因が影響する可能性が示唆されるものといえよう。しかし、

問題行動に関しては両尺度とも共有環境要因 (C) の影響性が認められ、Internalizing 尺度では5割近い高い値を示した。問題行

動を助長するような共有環境要因の存在は示唆される結果であり、具体的な内容を特定していく作業が求められよう。

表3 児童・思春期における気質的特徴と問題行動傾向の単変量遺伝分析による分析結果\*  
気質特性 (temperament) : ジュニア版 TCI で測定

(小学校1年生～中学3年生、計706組)

	対内相関		遺伝 (A)	共有環境 (C)	非共有環境 (E)
	MZ	DZ			
新奇性追求 (NS) (Novelty seeking : NS)	.16**	.04	15.4%	0.0%	84.6%
損害回避 (Harm avoidance)	.49**	.07	43.3%	0.0%	56.7%
報酬依存 (Reward dependence : RD)	.56**	.29**	55.8%	0.0%	44.2%
持続 (Persistence)	.28**	.05	24.9%	0.0%	75.1%

\*問題行動 (problem behavior) : Child Behavior Checklis/4-16 で測定

(小学校1年生～中学3年生、計706組)

	対内相関		遺伝 (A)	共有環境 (C)	非共有環境 (E)
	MZ	DZ			
攻撃的・反社会的、 反抗的、注意散漫な問題行動 (Externalizing problems)	.74**	.53**	54.0%	21.4%	24.6%
引きこもり、不安、 分離不安、心身症的問題行動 (Internalizing problems)	.70**	.59**	19.2%	48.6%	32.2%

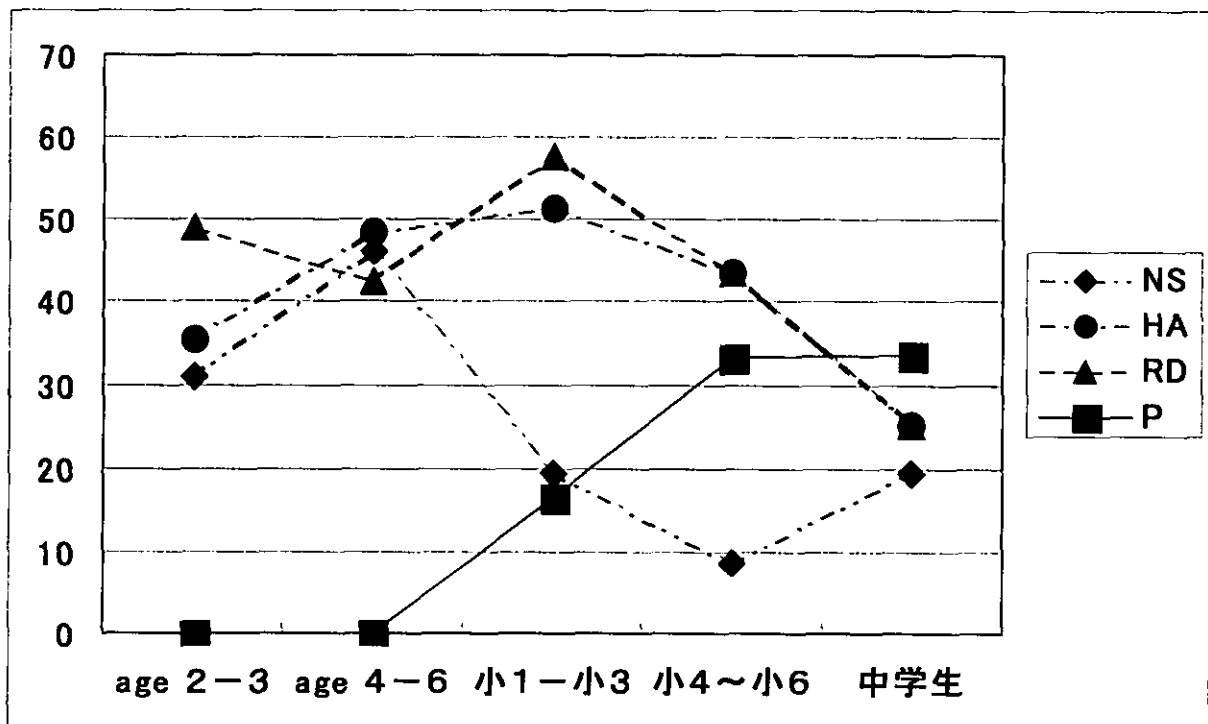


図3 年齢段階別の気質特性の遺伝率 (2-3歳版、4-6歳版、小学生版、中学生版)  
 (TCI, NS:新奇追求、HA:損害回避、RD:報酬依存、P:持続性)

\* 年齢ごとの遺伝・共有環境・非共有環境率 図3～図5に2-3歳版から中学生版までの各年齢版についての単変量遺伝解析の結果を示した。いずれの年齢版においても表3と同様に、TCIの気質特性に関してはAEモデルが、CBCLの2尺度についてはACEモデルの適合度指数が最も高い値を示した。問題行動2尺度については、中学生期で最も共有環境率が高まり、この時期の環境影響力の大きさを示唆する結果となった。

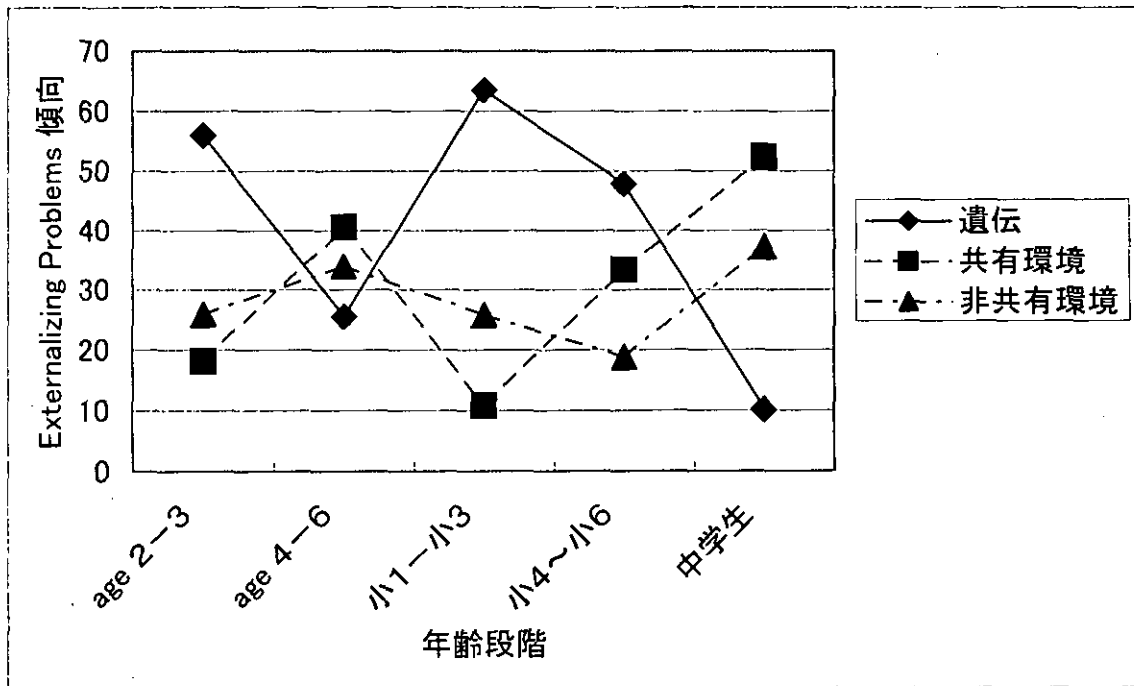


図4 年齢段階別の Externalizing な問題行動傾向の遺伝・共有・非共有環境率 (CBCL, 2-3 歳版、4-6 歳版、小学生版、中学生版)

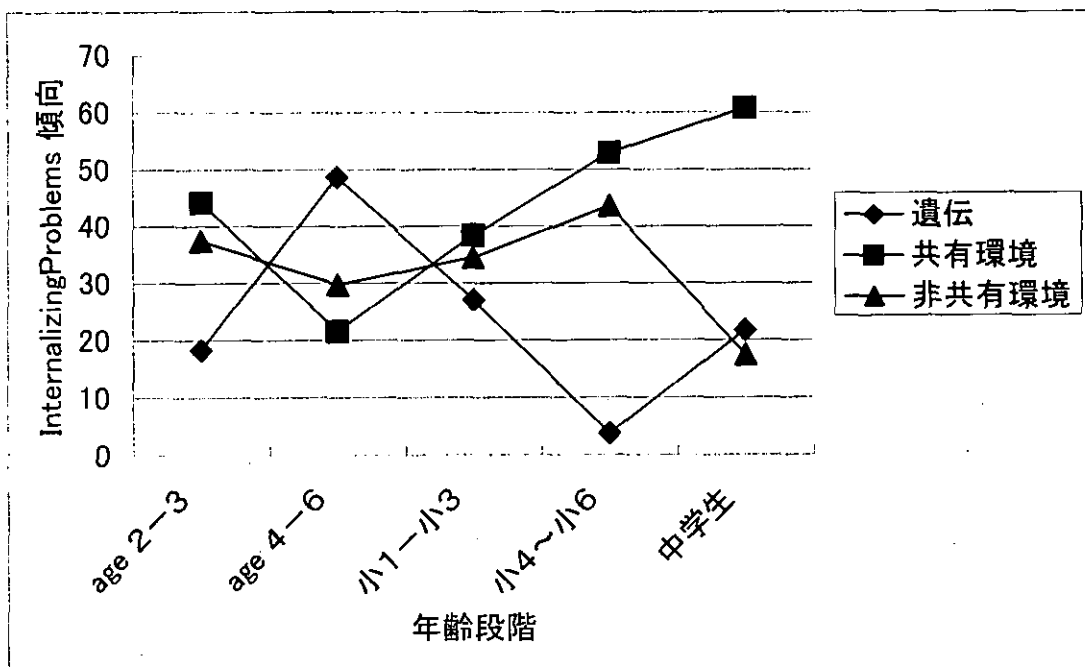


図5 年齢段階別の Internalizing な問題行動傾向の遺伝・共有・非共有環境率 (CBCL, 2-3 歳版、4-6 歳版、小学生版、中学生版)

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

子どもの不適応的行動の発達に関する長期追跡研究  
：“子どもの発達と家族の精神保健に関する縦断研究” から

お茶の水女子大学大学院人文化研究科

菅原ますみ

山梨大学教育人間科学部

酒井 厚

聖心女子大学文学部

菅原健介

（1） 目 的

子どもの様々な問題行動の発現に関わる諸要因の因果的関連性を探求するにあたっては、一時点での横断的研究 (cross-sectional study) ではなく、子どもの発達に沿った縦断的研究 (longitudinal study) が適している。諸外国には乳児期からスタートした長期縦断研究として、古くは1950年代後半のトマスとチェスらがニューヨーク在住の131名の乳児たちの行動発達を成人期に達するまで追跡した“ニューヨーク縦断研究<sup>1)</sup> (New York Longitudinal Study; NYLS, Thomas & Chess, 1991)”が著名であり、近年ではニュージーランドのダニーデン市で3歳から26歳まで2年ごとに約1000名の子どもたちを追跡したビッグプロジェクト：“ダニーデン健康と発達に関する学際的研究 (Dunedin Multidisciplinary Health and Development Study, Silva, 1990)<sup>2)</sup>”がある。さらに、アメリカでは、10万人の子どもたちの発達を誕生から21歳まで追跡する国家プロジェクト

National Children's Study<sup>3)</sup>が本格的な準備段階に入り、イギリスでも2000年に誕生した約18,000名の子どもたちとその家庭を対象としたミレニアムコホート研究<sup>4)</sup>が既に開始している。我が国でも数万人の子どもたちを誕生時から10年間にわたって追跡する「脳科学と教育」プロジェクト<sup>5)</sup>が文部科学省を中心に計画されてきている。

上記の諸追跡研究と同様に、我が国の子どもたちの精神疾患や問題行動傾向などの不適応的行動の発達メカニズムを解明するために、本研究班では、主任研究者らが対象児童が胎児期より開始した子どもの発達と家族の精神保健に関する発達精神病理学的な縦断研究（表1）を継続・発展させることを目的に、研究助成期間中に以下の作業を完了した：

- 1) 妊娠初期期より中学生期までの12時点の資料を整理し、結合データセットを完成させる。
- 2) 出産後19年目の追跡調査を実施する

表1：子どもの発達と家族の精神保健に関する長期縦断的研究の概要対象者：首都圏K市市立病院産婦人科受診者のうち1,260名が縦断研究に登録された。登録期間は1984年8月～1986年2月。

- \* 調査時期  
 : 妊娠初期・妊娠中期・妊娠後期・出産後5日目・1ヶ月目・6ヶ月目・12ヶ月目・18ヶ月目・6年目・9年目・11年目・15年目・19年目 (計13時点)
- \* 生後18年目の追跡調査  
 : 現在までに住所が判明している550世帯の父親・母親・対象児童に対して郵送による調査を実施。

(2) 方法および結果	子どもの問題行動と精神症状に関するチェックリストChild Behavior Checklist (CBCL)に関する縦断的関連性について報告する。なお、本縦断研究で実施してきている主な子どもの不適応行動に関する測定尺度は表2の通りである。
1) 妊娠初期よりの縦断的データの結合と解析	
これまでの調査の中で実施してきた子どもの不適応の発達に関する測定尺度の構造分析を実施し、幼少期より共通した特性次元で経年変化を検討することにした。ここでは第2章で検討をおこなった	

表2 “子どもの発達と家族の精神保健に関する長期縦断研究”：使用した主な不適応尺度

- \* 乳児期～思春期までの問題行動と精神症状尺度：
- ① 乳幼児期用問題行動リスト(衝動強度や衝動制御不全、依存など、佐藤、菅原他,1986)  
 : 生後6ヶ月用、18ヶ月用、5歳児用それぞれを該当年齢時に実施
- ② Child Behavior Checklist/4-18 親記入版 (CBCL, Achenbach & Edelbrock, 1991)  
 : 8歳、10歳、14歳、18歳で測定  
 →CBCLの2つの下位尺度 1) Externalizing Problems  
 : 注意欠陥、攻撃的、反社会的、反抗的、衝動的 傾向  
 2) Internalizing Problems  
 : 抑うつ、不安・恐怖、心身症的傾向
- ③ Depression Self-rating Scale (Birlleson, 1981)  
 :: 7～13歳の抑うつ症状の自己記入式尺度。18項目。10歳・14歳・18歳時に実施。
- ④ Child Assessment Schedule (Hodges et al., 1994)  
 :: 7～16歳の子どもの問題行動と精神症状に関する構造化面接尺度。DSMによる精神科診断が可能。親版と子ども版を8歳 (n=114) と10歳 (n=68) で実施。
- ⑤ 学校不適応感尺度、職場不適応感尺度(酒井、菅原他、2001など)
- 
- ① Externalizing problem 傾向の縦断的 衝動性が強くその制御性が乏しいために  
 関連性と関連要因について 他者に対する攻撃的行動や強度の反抗傾向、

または注意散漫・多動傾向などの行動として表現されることが多くなると、子どもの家庭内や学校での不適応は助長され、様々な問題にも関連してくる。発達精神病理学の領域では、子どものこうした衝動的・反社会的な問題行動傾向を externalizing problems と総称し、犯罪や非行、様々な精神疾患などとの関連性について多くの研究がなされてきている。本研究でも抑うつや不安などの情緒障害の問題とともに、こうした子どもの externalizing problems 傾向についても注目し、乳幼児期から測定を繰り返してきている。どのような発達過程を経るのか、危険因子 (risk factors) は何

か、さらに予防的に役に立つような防御的要因 (protective factors) を見出すことができるのかについて、検討することを目的としているが、次節で述べるように、平成 15 年度の追跡調査で青年期まで (胎児期～18 歳) のデータを得るので、今後詳細な検討をおこなっていきたいと考えている。

表 3 に今回の分析で使用した CBCL (8 歳版、10 歳版、14 歳版) の externalizing problems 尺度の構成項目 (CBCL 全項目の因子分析より第 1 因子として抽出された尺度) を、また表 4 に乳幼児期の萌芽の形態に関する尺度項目を示した。

表 3 CBCL: Externalizing Problems 尺度構成項目 (因子負荷量)

1) 騒がしい (.71)	12) シャベリすぎ (.55)
2) ののしり、卑しい言葉 (.66)	13) 頻繁な口ゲンカ (.53)
3) 家で従わない (.65)	14) 不平を言う (.53)
4) かんしゃく (.62)	15) 世話の要求 (.49)
5) しばしばケンカ (.61)	16) 学校で従わない (.49)
6) 気分が激変 (.61)	17) 愛情不足と文句いう (.44)
7) からかい (.60)	18) 不正なこと平気 (.41)
8) 非常なひねくれ (.58)	19) 友人関係が悪い (.40)
9) 集中力なし (.58)	20) 劣等感が強い (.40)
10) 激怒性 (.57)	21) 疑り深い (.40)
11) 落ち着きなし (.56)	

\* 20 項目の信頼性係数 (Cronbach の  $\alpha$  係数) :  $\alpha = .90$

表4 Externalizing problems の乳幼児期における萌芽的形態

：“衝動の強さとコントロールの脆弱さ” 傾向	
<生後6ヶ月：乳児期（因子負荷量）>	<1歳半・5歳時：幼児期（因子負荷量）>
1)ぐずって寝つきが悪い (.78)	1)叱ると反抗する (.81)
2)一度ぐずるとなだまらない (.76)	2)わがまま (.81)
3)すぐにかんしゃくを起こす (.74)	3)親の言うことをきかない (.78)
4)ちょっとしたことで激しく泣く (.68)	4)すぐにかんしゃくを起こす (.72)
5)抱きぐせがついてしまった (.66)	5)乱暴 (.68)
6)夜泣きが激しい (.61)	6)あきっぽい (.63)
7)睡眠時間が不規則 (.55)	7)一度ぐずるとなだまらない (.63)
	8)気が散りやすい (.58)
	9)よくいたずらする (.57)
	10)ちょっとしたことで激しく泣く (.48)

表5 Externalizing problems 傾向の縦断的関連性

(注意欠陥、攻撃的、反社会的行動傾向、N=277)

	生後18ヶ月	5歳	8歳	10歳	14歳
生後6ヶ月	.52**	.37**	.35**	.26**	.22**
18ヶ月	—	.50**	.42**	.35**	.31**
5歳	—	—	.49**	.54**	.42**
8歳	—	—	—	.64**	.49**
10歳	—	—	—	—	.56**

(\*\*：p < .01)

本研究では多様な関連要因について測定を実施してきている。家庭の社会経済的要因（養育者の学歴、年収、職業、就労時間などのライフスタイル）、子どもの気質および性格的要因、養育者の精神的健康度、養育行動、家族の関係性（親子関係、夫婦関

係、家族の全体性）、対象児童の学校要因、といった諸要因と externalizing problems 傾向および抑うつ傾向（自己記入式尺度）との関連について、現在までに解析を実施してきた範囲での結果の要約を表6に示した。



---

\*子ども関連要因

- 1) 基本属性→ 性別、出生順位、出産時状況どれも Externalizing, Depressive とも全体的には関連がみられないが、診断面接群の ADHD (注意欠陥・多動性障害では男児の発生率がやや高め。
- 2) 行動特徴→ Externalizing で、乳幼児期の気質に差があり (High 群は、より注意の集中性や衝動統制性が低く反応強度が高い)。Depressive では差はなし。

---

\*家庭の社会経済的要因

: Externalizing で、High 群は親の学歴や収入が関連するが、Depressive では差はなし。

---

\*家族関係母子関係 : 妊娠確認時の意識や出産前の母親の子どもへの愛着感には

Externalizing, Depressive とも差はなし。

Externalizing では、生後 18 ヶ月以降、母親の子どもに対する愛着感のうち、Negative な側面 (わずらわしいなど) で児童期での High 群の方がより高くなっていき、生後 10 年目には、Positive な側面 (かわいい、いじらしい など) も低下していく。

- 2) 夫婦関係 : Depressive の High 群では、生後 5 年目から母親の父親に対する信頼感や愛情がより低くなっていく。Externalizing でも同様の傾向あり。
- 3) 家族全体性 : Externalizing, Depressive ともに High 群の方が 10 年目での家庭の雰囲気より冷たく家族の絆がより弱い。

---

② 母親要因との因果的関連性について  
青少年が凶悪な犯罪を引き起こすたびに、“親の育て方に問題があったのではないか” という論評がマスコミを賑わす。とくに、母親の愛情不足や厳しすぎる養育態度などが槍玉に挙げられることが多い。研究レベルでも、“就学前における母親の不良な養育が発達早期の統制不全型の問題行動傾向を生み出し、それが児童期に至って友人関係や学業成績の不良さにつながり、思春期以降の非行行為に結実していく” という発達モデルも提唱されている。しかし表 5 で見たように、このタイプの問題行動の発達の起源が乳幼児期にまで遡る場合もあるとすれば、子ども自身の問題傾向が先にあって、母親の愛着感の低下や厳しい養育態度はその結果として生じてきた可能性も論理的には成立する。こうした親要因との絡

みを扱ったこれまでの研究は、子どもが児童期以降で開始されたものがほとんどなので、これらから“ニワトリが先か卵が先か”をはっきりさせることはできなかった。

今回の分析では、生後 6 ヶ月時から 14 歳に至るまでの 6 時点 (生後 6 ヶ月・18 ヶ月・5 歳・8 歳・10 歳・14 歳) での externalizing problems 傾向得点と、母親の子どもに対する愛着感に関するデータを用いて、上述の“ニワトリと卵”問題に関する解析を試みることにした。

生後 11 年目の時点で統制不全型の問題行動が多く出現したグループ (High 群) とほとんど出現しなかったグループ (Low 群) の 2 群について、母親の子どもに対する否定的感情の時間的推移を比較してみると、妊娠中から生後 1 ヶ月目までは差がみられない。もともと母親の子どもに対する否定

的感情が強かったから、子どもにこうした問題行動が出現した、という順序にはなっていないことがここから読み取れる。また、図1は、14歳に至るまでの両者の関係の流れを表わしており、両者間に引かれた斜めの矢印が因果の方向（どちらが原因となっているか）を示している。5歳までは子ども側から母親側へ斜めの矢印のみが確認され、5歳から8歳のところで初めて母親側から子どもへの斜めの矢印が出ている。母親の子どもに対する否定的な感情は、乳幼児期ではむしろ対象児の問題行動傾向に引きずられるかたちで深化していく様子が伺え、統制不全型問題行動の先行要因として親の子どもに対する愛着感の欠如を仮定している従来のモデルとは反対の因果関係が確認されたといえよう。

児童期に至ると、母親の否定的な愛着感

は子どもの問題行動の発達に対してもついにネガティブな促進要因として働くようになり、両者の間に悪循環のパターンが出現している（図1）。漸次高まっていく母親の子どもに対する否定的な気持ちは、暖かさに欠ける養育行動となって直接的に子どもに影響するようになっていくと考えられる。しかし、思春期の問題行動傾向に対しては母親側からの矢印は確認されず、先行する子ども自身の問題傾向とのみ関連していた。思春期以降は親要因の影響力は相対的に弱まり、友人関係や学校要因など家庭外の要因の影響が顕著になってくるのかもしれない。いずれにしても、ここで見たように、子どもの問題行動と親要因との関係性は常識で想像するよりもはるかに複雑であり、子どもの発達段階に応じて丁寧に検討されなくてはならないものであるといえよう。

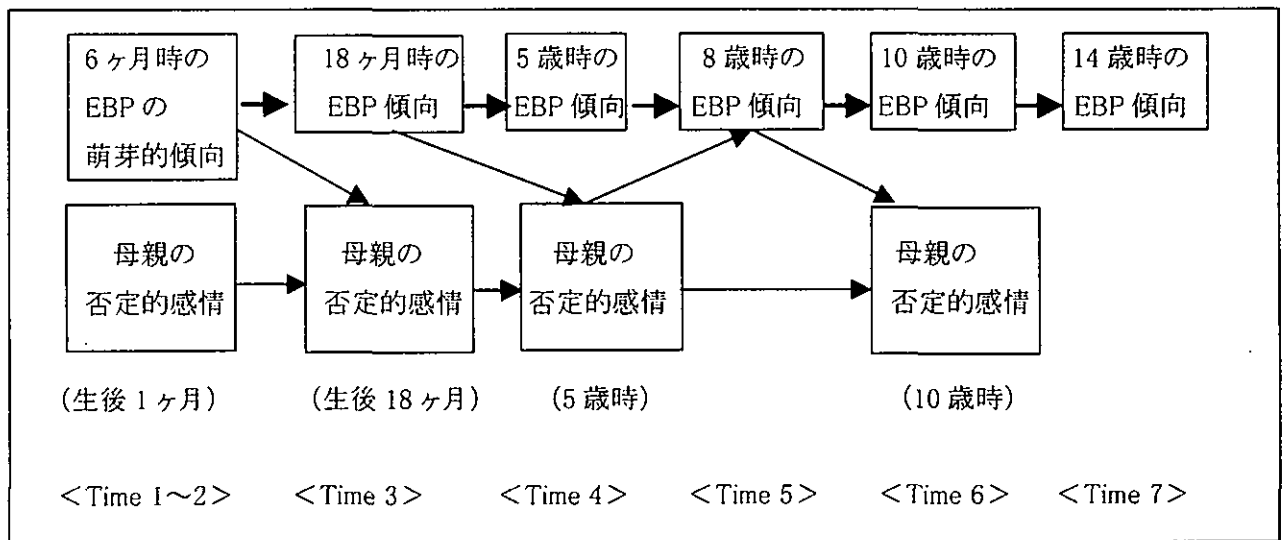


図1 Externalizing Behavior Problems と母親要因との縦断的関連

(N=277, パス解析の結果から、矢印は有意なパス係数を示したもののみ記載した)

2) 生後19年目の追跡調査の概要

平成16年1月から3月にかけて、本長期縦断サンプルを対象にした生後19年目(対

象児童の年齢は17~19歳)の追跡調査を実施した。これまでに実施してきた追跡調査と同様の枠組および手法を用いて、郵送に

よる質問紙調査を実施した。これまでに住所の判明している約 550 家庭を対象に調査依頼文書に続いて郵送による質問紙の配布・回収をおこなった。

\* 質問紙構成：母親回答版、母親による子どもの行動調査票（Child Behavior Checklist/4-18 歳親記入版、不登校や引きこもり行動の有無・期間など）、父親回答版、青年（子ども）回答版の 4 種類を作成した。

\* 内容：両親・子どもともに、基本属性（職業、年収、就労時間など）に加えて、精神的健康度（自己記入式抑うつ尺度）、学校や職場への適応感、日常生活感情尺度など、家族関係（親子関係、夫婦関係、家族の全体性）などを尋ねる尺度・項目を用意した。青年版では、自己記入式のパーソナリティ尺度（Temperament and Character Inventory, Cloninger, 1994）および進路選択に関する意識・行動項目、友人関係尺度などについても尋ねている。

\* 実施期間および方法：平成 16 年 1 月から郵送による配布・回収を開始した。平成 16 年 3 月現在で、父親 220 名、母親 273 名、青年期の子ども 257 名から回答を回収し、現在も回収を継続している。研究に対する説明文書を作成し、同意の得られた個人（父親・母親・子ども）について同意書に記名を依頼した。

### 3) 18 歳調査時までの非行・引きこもり・不登校の体験率と発現の先行要因

生後 19 年目調査（対象児童の年齢は 17～19 歳、N=257）において、約 18 歳時点までの ①引きこもり、②不登校、③非行行動の体験の有無と先行する関連要因について

暫定的な解析を実施した。以下、概要を報告する：

\* 引きこもりおよび不登校の体験率・・・「これまでに身体的理由がないのに、家や自分の部屋から出られなくなったことがあるか」（引きこもり行動）、「これまでに身体的理由がないのに、学校に行かなく（行けなく）なったことがあるか」（不登校）という設問に対し、“ある”と解答した者は“引きこもり”で 6 名（2.4%、男子 2 名、女子 4 名），“不登校”では 31 名（12.1%、男子 14 名、女子 13 名、不明 4 名）であった。体験年齢引きこもり、不登校ともは 11 歳から 17 歳までに分布しており、持続期間では、引きこもりは 3 名が 1 ヶ月以内、2 名が 2～3 ヶ月間、1 名が 6 ヶ月以上であった。不登校の持続期間は、1 ヶ月以内が 15 名、2～3 ヶ月間が 7 名、4～5 ヶ月間が 1 名、6 ヶ月以上が 5 名であった。

\* 非行行動の体験数・・・CBCL の非行領域尺度から、“家出”、“放火”、“窃盗”、“怠学”、“飲酒・シンナー”、“破壊行動”、“罪悪感の無さ”、“問題ある交友関係”、などの 12 項目について各体験数を算出したところ、これら 12 項目の体験が 1 項目もない者が全体の 56.6%であった（全体の平均体験数は 1.22）。4 つ以上の体験のある 30 名を今回の分析における非行体験群と操作的にグルーピングをおこなった。

\* 引きこもりは体験人数が 6 名と少数であったため、以下の関連要因の探索的検討からは除外することにした。不登校体験のある 31 名を不登校体験群、非行体

験（4項目以上の体験者）のある30名を非行群とし、本人関連要因について体験の無い群との比較を試みた（平均値の差の t-検定）。主な結果を表7に示す。今後、データの完全回収を終了させ、家

庭内外の要因との因果関係を含めた関連性の検討を詳細に実施していく予定である。

表7 18歳時点までの不登校体験と非行体験の本人の先行要因の概要

---

\* 本人要因：

- ・性別発現率には差はなかった。
  - ・乳幼児期の気質の特徴では、不登校群は乳児期（生後6ヶ月）・幼児期（1歳半）での見知らぬ人・場所に対する恐れ傾向がより強傾向が若干見られ（ $p < .10$ ）、10歳時点でも同様な特性次元（損害回避傾向）で10%水準での傾向差が観察された。非行行動発現群ではさらに差が明確で、非行発現群の方が乳児期の人見知り傾向が有意に低く（ $p < .01$ ）、乳児期も幼児期もともに“体内リズム”がより不規則であることが示された（ $p < .05$ ）。
    - ・先行する問題行動傾向では、不登校群では10歳時点でのCBCLのinternalizing（抑うつ、心身症状など）尺度得点がより高めであることが示された。一方、非行群では、生後1歳半より4時点（幼児期・児童期・思春期）で一貫してexternalizing problems 尺度の得点が有意に高く（ $p < .01$ ）、また10歳時点のinternalizing 尺度の得点も有意に高いものであった。
-

<文献>

- 1) Thomas, A., & Chess, S. 1986 The New York Longitudinal Study: From Infancy to Early Adult Life. In R. Plomin & J. Dunn (Ed.), *The Study of Temperament: Changes, Continuities and Challenges*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. Pp. 39-52.
- 2) Silva, P. A. 1990 The Dunedin Multidisciplinary Health and Development Study: a 15 year longitudinal study. *Paediatric and Perinatal Epidemiology*, **4**, 76-107.
- 3) NCS: National Children's Study <http://nationalchildrensstudy.gov/>. 2004
- 4) Smith, K. & Joshi, H. 'The Millennium Cohort Study' Population Trends , No: 30-35, 2002
- 5) 科学技術振興機構社会技術研究事業「脳科学と教育」<http://www.jst.go.jp/>, 2004.

# 添付資料



子どもの名前:		ID 番号	
深刻な障害	中程度の障害	軽度の障害	最低限の障害が障害なし
深刻な障害または存在する能力を発揮することが障害されている	かなりのまたは持続する障害	問題視されるべきこと存在または心痛	機能に障害はない
(30)	(20)	(10)	(0)
001 登校拒否、解雇されたことが原因で学校または仕事に行っていない 002 放校処分になった 003 言動や行動に表される攻撃性の高さから、ほかの人に危険を及ぼすと判断されたり、行動を観察する必要があるとされた 004 教師、他の生徒、同僚または上司に怪我をさせた、または脅した 005 特別な取り計らいなしではクラスでの最低限の決まりが守れない(普通学校でも、特別な学校でも) 006 慢性的な登校拒否が原因で、何らかの望ましくない結果に及んでいる(授業の単位がとれない、落第点を取る、親に連絡がいく) 007 登校拒否以外の理由で慢性的に学校を欠席していて、何らかの望ましくない結果に及んでいる(授業の単位がとれない、落第点を取る、親に連絡がいく) 008 注意力のなさ、過度の活動性から来る行動が特別な環境に移されたあとも持続する 009 ほとんどの教科で落第する 010 学校から退学し職を探していない	012 決まりを守らないことで、クラスやグループの活動がしばしば妨害され、行動の深刻さや慢性性がクラス担任よりもうえの教師(校長など)にも知られている 013 不適切な行動から、クラスやグループの活動がしばしば妨害され、行動の深刻さや慢性性がクラス担任よりもうえの教師(校長など)にも知られている 014 頻繁に無断欠席する(およそ2週間に一回の欠席、または数日連続した欠席) 015 身体的障害以外の何らかの障害があることで、頻繁に欠席する(無断欠席ではない。頻繁な欠席はおよそ2週間に一回の欠席、または数日連続した欠席を指す) 016 職場での遅刻、欠席で厳しく注意された 017 注意力が乏しいこと、活動性が高いことで行動が妨害的で、特別な対応を受けている、またはそれが必要とされている 018 職場で厳しく注意された 019 身体的障害、精神的障害以外の理由で、学校での成績が全て2以下である 020 身体的障害、精神的障害以外の理由でとっている教科の半分以上を落第した	022 決まりを守らないことが原因で、担任の教師または上司が子どもの行動を注意して観察しなくてはならない(他の子どもに比べてより多くの注意を要する) 023 不適切な行動が原因で、担任の教師または上司が子どもの行動を注意して観察しなくてはならない(他の子どもに比べてより多くの注意を要する) 024 他の子どもに比べて学校の校則を守らないことが多いが、誰にも危害は及ばない、物を壊すこともない。 025 注意力の乏しさ、活動性の高さからくる問題はあがるが、クラスの活動を妨害はしない(特別なクラスに子どもを移す必要はない、子どもは満足ゆく活動をする事ができる) 026 物事をやり遂げることができないため、能力に見合う学校または職場での活動ができない	028 ほとんどの役割りを果たすことができる 029 小さな問題があってもそれを解決することができる 030 妨害されることもあるが、機能は満足ゆくレベルにある 031 学校の成績は平均またはそれ以上である 032 発達遅滞はあるが、子どもは自分の能力にあった学校での活動ができる 033 学習障害はあるが、子どもは自分の能力にあった学校での活動ができる 034 他の子どもに比べると学習速度は遅いが、自分の能力にあった学校での活動ができる 035 母親のアルコールまたは物質使用による学習障害があるが、子どもは自分の能力にあった学校での活動ができる 036 職業学校またはそれに当たるものに行っていて、満足ゆく成績をとっている 037 高校を卒業した 038 学校を退学して、職に就いた、または職を探している
学校/職場 (役割)			
011 例外	021 例外	027 例外	039 例外
説明:			040 得点化不可能

長所/目標: 学校・職場下位尺度 (オプション: この尺度を評定することは CAFAS 評定に影響を与えない)

- |                               |                                       |
|-------------------------------|---------------------------------------|
| S/G 1 学校に行くことを許可されている         | S/G 13 学校での勉強をやり遂げられる                 |
| S/G 2 欠席より出席のほうが多い            | S/G 14 成績は中かそれ以上だ                     |
| S/G 3 登校状況がいい                 | S/G 15 高校を卒業した                        |
| S/G 4 問題があるときは援助が役立つ          | S/G 16 学校の勉強に対してよい感情を持っている            |
| S/G 5 学校での攻撃的または脅迫的な行動は見られない  | S/G 17 学校に行くのが好きである                   |
| S/G 6 生徒指導の教師のところに送られることが少ない  | S/G 18 勉強の大切さを理解している                  |
| S/G 7 生徒指導の教師のところに送られたことがない   | S/G 19 読書が好きだ                         |
| S/G 8 特別学級の教師なら行動をコントロールできる   | S/G 20 学校が終わった後のクラブ活動に参加している          |
| S/G 9 普通学級の教師が行動をコントロールできる    | S/G 21 仕事を次々とかわらない                    |
| S/G 10 机に向かって座っていられる(年齢を考慮する) | S/G 22 仕事が満足にできる                      |
| S/G 11 クラスでの行動はよい             | S/G 23 (10代の子どものみで子どもがいる場合は) 勉強を続けている |
| S/G 12 教師とうまくやっっている           | S/G 24 その他 ( )                        |



子どもの名前：		ID 番号	
深刻な障害	中程度の障害	軽度の障害	最低限の障害か障害なし
深刻な障害または存在する能力を 発揮することが障害されている	かなりの または持続する障害	問題視されるべきこと の存在 または心痛	機能に障害はない
(30)	(20)	(10)	(0)
041 家庭での行動が原因で 自宅に住んでいない（自宅 に住んでいるとしても、そ こに住まわせておくため にまわりの人が監督して いる必要がある）	051 家庭での決まり事を守 れないことが多い、ほとん どの場合反抗的である	057 家庭での決まりが守れ ない	062 たいいてい家庭での決 まりは守る
042 自宅に住まわせておく ためにまわりの人が監督を している必要がある	052 冒流的、俗悪な行動、 家族に向かって暴言を吐く	058 家事をさせるため、約 束を守らせるためには子 どもを気を付けて見ている必 要がある	063 小さな問題はあるが、 解決することができる
家庭 (役割)	043 同居している人たちに 身体的に危害を加えるとい う深刻な脅迫を与える	053 無責任な行動で危険な ことを引き起こす（キッチ ンの火をつけっぱなしにす る）	059 家事をすること、言い付 けを守ることを拒否するが、 親または親に代わる存在が 強く言えばする
	044 同居人に対する脅迫を 繰り返す	054 無断外泊をしたが、居 場所は親または親に代わる 存在に知れていた	060 故意に腹の立つような ことを頻繁にする（兄弟を ののしる、わざとだらだら と過ごす）
	045 ほとんどすべての場合 において、親または親に代 わる存在のいうことをきか ない（頻繁に門限を破るな ど）	055 故意に家庭のなかのも のを壊す	
	046 家庭の安全を保つため にいつも子どもを監督して おかなくてはならない		
	047 子どもを監督しておか なくてはいけないことで、 親または親に代わる存在の 仕事に差し障りがある、他 のことをすることに差し障 りがある		
	048 一度以上または数日に わたって家出をしたことが あり、居場所が親または親 に代わる存在に知らせてい なかった		
	049 家庭のなかの物を故意 に壊す、この行動は深刻な ものである（家具、家屋）		
	050 例外	056 例外	061 例外
			064 例外
			065 点数化不可能
説明：			

長所/目標：家庭下位尺度 (オプション：この尺度を評定することは CAFAS 評定に影響を与えない)

- |                              |   |
|------------------------------|---|
| S/G 25 家庭での行動は攻撃的、脅迫的ではない    | S/G 34 家庭での決まりをたいいてい守る                      |
| S/G 26 家族に対して冒流的な言葉づかいをしない   | S/G 35 何かをしようとしているときは<br>十分な時間をもって親に事前に知らせる |
| S/G 27 家の中のものを大切にす           | S/G 36 よその家庭を訪問するときははっきりした行動をとる             |
| S/G 28 援助があれば行動が家庭でコントロールできる | S/G 37 よくないことをしたらその結果を受け入れる                 |
| S/G 29 援助なしで行動が家庭でコントロールできる  | S/G 38 家族ですることには参加する                        |
| S/G 30 監督されていなくても安全な行動をとる    | S/G 39 家庭の手伝いをする                            |
| S/G 31 誰かと意見が合わなくても衝動的に反応しない | S/G 40 その他 ( )                              |
| S/G 32 親による監督の必要性を理解している     |   |
| S/G 33 門限を守る                 |   |

子どもの名前:		ID 番号	
深刻な障害	中程度の障害	軽度の障害	最低限の障害か障害なし
深刻な障害または存在する能力を発揮することが障害されている	かなりのまたは持続する障害	問題視されるべきこと存在または心痛	機能に障害はない
(30)	(20)	(10)	(0)
066 違法行為(被害者がその場にいる強盗、自動車を盗む、スリ、物質の取り引きに関わっている、レイプ、殺人、発砲など)をしたために、拘留されている	073 深刻な、または頻繁な素行不良(被害者はその場にいない強盗、物を壊す、車を持ち主に無断で乗り回す)	080 法的違法行為(程度は深刻ではなく、危険な運転をする、人の家庭の敷地内に無断で入る、近所の人の迷惑になるようなことをする)	084 地域社会に悪い影響をあたえない
067 違法行為(強盗、自動車を盗む、スリ、物質の取り引きに関わっている、レイプ、殺人、発砲など)をしたという証拠があるまたは有罪の判決を受けた	074 3ヶ月以内に行った犯罪で受けた刑の執行猶予期間中である	081 一度だけ建物に傷を付ける、万引きをする	085 小さな問題はあってもたいていは対処できる
068 身体的に脅しを加えた、または武器で脅したことで、法律的な機関と関わりを持った、または保護観察下に置かれた	075 最近3ヶ月よりも前に行った犯罪で受けた刑の執行猶予期間中である	082 一回以上火遊びをした	
069 性的攻撃的な行動のため、または性的不適切な行動のため、法律的な機関と関わりを持った、または保護観察下に置かれた	076 頻繁で深刻な違法行為により、現在拘留される可能性が高い		
070 家庭以外(自動車、学校、建物)を故意に破壊する	077 性的に不適切な行動をとることから、まわりの大人はこの子どもと他の子どもを二人きりにするのは危険だと感じる		
071 故意な放火	078 人が怪我をしたり、建物が燃えたりするような仕方火遊びをする		
072 例外	079 例外	083 例外	086 例外
説明:			087 得点化不可能

長所/目標: 地域・社会下位尺度 (オプション: この尺度を評定することは CAFAS 評定に影響を与えない)

- |                                      |                                     |
|--------------------------------------|-------------------------------------|
| S/G 41 最近逮捕されたことはない                  | S/G 54 法律やルールを守る                    |
| S/G 42 最近違法なことはしていない                 | S/G 55 人に敬意をもって関わる                  |
| S/G 43 放火をしたことはない                    | S/G 56 社交的な友達と付き合っている               |
| S/G 44 性的に不適切なことをしたことはない             | S/G 57 社交的なことに属している                 |
| S/G 45 集団になって悪いことをすることはない            | S/G 58 (反社会的なことではない) レジャーを楽しんでいる    |
| S/G 46 問題を起こす友達から離れようと努力している         | S/G 59 家族以外にサポートを得られる人がいる           |
| S/G 47 武器を持って歩いていない                  | S/G 60 ボランティア活動をしている                |
| S/G 48 問題には巻き込まれないようにしている            | S/G 61 自分の属する文化を大切にしている             |
| S/G 49 地域で問題のある子だとはされていない            | S/G 62 自分の文化に対して自分が属しているという感覚を持っている |
| S/G 50 裁判所などから言い渡されたことはする            | S/G 63 自分の文化の文化的活動に参加する             |
| S/G 51 問題をおこさないようにしようと思っている          | S/G 64 精神的、宗教的な活動に参加している            |
| S/G 52 犯した過ちの責任はとる                   | S/G 65 その他 ( )                      |
| S/G 53 自分の行動が人を傷付けたり、人に迷惑だったことを真に認める |                                     |

子どもの名前:		ID 番号	
深刻な障害	中程度の障害	軽度の障害	最低限の障害か障害なし
深刻な障害または存在する能力を 発揮することが障害されている	かなりの または持続する障害	問題視されるべきことの存在 または心痛	機能に障害はない
(30)	(20)	(10)	(0)
088 行動がいつもとても風変わりである 089 破壊的な行動のため他の人の安全が危ぶまれる 090 誰かに性的な攻撃を加えたまたは加えようとした 091 故意に動物に残酷なことをする	093 行動が多くの場合不適切で(けんか、好戦的な態度、無差別に性関係を結ぶ)自分とまわりの人に問題をおこす 094 人が周りにいるときに不適切な性行動を行う、他者に向けて性行動を見せる 095 意地悪なことをする、妬み深い 096 判断力に欠ける事で、または、衝動的な行動で問題を引き起こす 097 頻繁に他者に対して怒りをぶつける 098 他者にまたは動物に対して意地悪をする 099 他者と関わりを持つときはたいてい搾取的、操作的である(人を利用する) 100 グループのようなものに属して人を脅すようなことを、嫌がらせのようなことをする 101 敵対的な行動から同年齢の子どもといつも問題がある	103 いつも理屈っぽく、けんか好きで、人に腹をたたせる 104 年齢に相応しい判断力に欠けること、年齢に合わない衝動的な行動をとることで人の迷惑になる 105 欲しいものがすぐ手に入らないとき、批判されたとき、何かが思うどおりにならないときすぐ癪癪をおこす 106 他の子どもよりもすぐに腹を立てる、強く反応する、短気である 107 他の子どもにも無視されたり、拒否されることでその年齢のほかの子どもがしているような遊びに加われない 108 ふざけること、人をばかにすること、あら捜しをすることなどが原因で、同年齢の子どもとの関係がうまく持てない、友達を作れない 109 未熟な行動から、同年齢の子どもとの関係をうまく持てない、または友達のほとんどが自分よりも年下である	111 人との満足のゆく関係がもてる 112 年齢に相応しい人間関係を保つことができる 113 人との意見が合わないことがあっても、対処できる
他者に 対する行動			
<input type="checkbox"/>			
092 例外	102 例外	110 例外	114 例外
説明:			115 得点化不可能

長所/目標: 他者に対する行動下位尺度 (オプション: この尺度を評定することは CAFAS 評定に影響を与えない)

- |  |  |
|--|--|
| S/G 66 対人関係スキルに欠けているところがあることを認めていて、何とかしようとしている | S/G 75 スポーツなど、友達との活動に参加する                |
| S/G 67 もっと多くの友達を作ろうとしている                       | S/G 76 人に共感できる                           |
| S/G 68 困難な問題がある時は、コーピングスキルを使って対処しようとしている       | S/G 77 動物にやさしい                           |
| S/G 69 衝動性をコントロールできる                           | S/G 78 親または親に代わる存在のうち、誰か一人とは関係がうまくいっている  |
| S/G 70 怒りを言葉で表現できる、身体を動かすことで解消できる              | S/G 79 誰か一人は自分を愛してくれている人がいる              |
| S/G 71 よい友人関係をもっている                            | S/G 80 兄弟の一人とはうまくいっている                   |
| S/G 72 他のひとを尊敬している                             | S/G 81 家庭を支持的なものだと感じる                    |
| S/G 73 健全な自己主張をしている                            | S/G 82 (10代の親の場合は) 責任のある養育をしている          |
|  | S/G 83 責任のある性行動<br>(性行動をしない、一人のパートナーがいる) |
| S/G 74 地域社会のクラブに属している                          | S/G 84 その他 ( )                           |

子どもの名前:		ID 番号		
深刻な障害	中程度の障害	軽度の障害	最低限の障害が障害なし	
深刻な障害または存在する能力を 発揮することが障害されている	かなりの または持続する障害	問題視されるべきことの存在 または心痛	機能に障害はない	
(30)	(20)	(10)	(0)	
気分/感情  (気分は… 不安、 抑鬱、 気分の 変わり易さ、 恐怖、 心配、 イライラ感、 緊張、 パニック、 喜びの減退)  <input type="checkbox"/>	116 感情的反応がほとんど いつも不適當である(理屈 にあわない、過剰である) 117 恐怖、心配事、不安が 原因で学校を欠席しがちにな る(週1日以上欠席する) または社会的に引きこもる (友達の家に行かなくな る) 118 抑鬱感成績不良をと もなっている(週1日以上 欠席する、登校したとし ても勉強しない)または、社 会的孤立(友達から離れて 行動する) 119 抑鬱感死にたいとい う考えを伴っている	121 強い感情を感じ、それ が急に変る 122 持続的な抑鬱感、また は悲しみが(少なくとも半 分以上の場合)、以下の少 なくとも1つを伴って存 在する:睡眠、摂食、注 意力、エネルギーのレ ベル、または通常の行 動障害 喜びの減退だけがある 場合は、上記の2つ以上 のものを伴っている必要 がある 123 持続的な過剰な心配 が以下の1つを伴って いる:睡眠障害、疲労感 、注意力、イライラ感、 筋緊張、緊張 124 恐怖、心配、不安が 原因で子どもは親または 親に代わる存在から離 れたが、学校に行ったり 、社会的な活動に参加 することはできない 125 心配や不安から特別 な計らいが必要である (親の側で寝る、家庭に 電話をかけるなど) 126 感情鈍磨(感情的な 表現がとて乏しい)	128 しばしば不安、怖が っている、悲しいと感じ て、それに関わるほかの サインも見られる(悪夢 、腹痛など) 129 イライラ感、恐怖、 不安の過剰な表現 130 大変自己批判的であ る、自己評価が低い、自 分には価値がないと感じ る 131 間違いをおかすとす ぐにひどく気にする 132 批判されると悲しむ 、引きこもる、傷つく、 不安になる 133 2、3日継続的に悲 しいと(抑鬱または喜び の減退)感じる、または 不安を感じる 134 感情的な表現が乏 しい(恐怖や憎しみ、ま たは愛といったつよい 感情を表現することが できない)  135 例外	136 何かについて悲し んだり、苦しんだりす ることがあっても、日 常生活に支障はない 137 自分はまあまあ 大丈夫だと思っている 138 強い感情を表現 することができる 139 年齢に相応しい 悲しみや不安の体験 がある
120 例外	127 例外		140 例外	
説明:			141 得点化不可能	

長所/目標: 気分・感情下位尺度 (オプション: この尺度を評定することは CAFAS 評定に影響を与えない)

- |                             |   |
|-----------------------------|---|
| S/G 85 感情を適切に表現できる          | S/G 97 感情や不安に対処するためそのことから目をそらせ、<br>他のことを使用とする |
| S/G 86 感情的なニーズを表現できる        | S/G 98 心配ごとを人に話して、本当に心配すべきことか意見を求める           |
| S/G 87 様々な感情を表現することができる     | S/G 99 人と話すことで感情的反応に対処しようとする                  |
| S/G 88 自分がどんな感情を経験しているかわかる  | S/G 100 感情的反応はそれを喚起した出来事にあっている                |
| S/G 89 友達との活動に興味がある         | S/G 101 身体的愁訴がない                              |
| S/G 90 自分を必要以上に責めない         | S/G 102 感情的問題があるにも関わらず学校に通っている                |
| S/G 91 自分について肯定的な感情を持っている   | S/G 103 感情的問題があるにも関わらず友達との活動に参加する             |
| S/G 92 自分のことがわかっている         | S/G 104 感情的苦痛なしに保護者からしばらくのあいだ離れていられる          |
| S/G 93 ユーモアがある              | S/G 105 自殺しようという考えはない                         |
| S/G 94 感情を表現できる場を持っている      | S/G 106 その他 ( )                               |
| S/G 95 自分の面倒が見られる           |   |
| S/G 96 感情や不安に対処するため自分に話しかける |   |